

地域の取組

「南米系の子ども・若者と家族の 置かれた状況から考える」

第128回労働政策フォーラム（2023年10月13日-19日）オンライン開催
「外国にルーツを持つ世帯の子育てと労働を考える」

山野上麻衣

0. はじめに① 報告資料の流れ

1. 日本の南米系移民の置かれた文脈
2. 当事者の若者は、何を考え、どう生きているのか？
3. 社会のマジョリティの考えと、当事者の若者たちの現実のズレ
4. 日本社会で大人になるための「標準的で正しい」道のりとは？
5. 対策としての「キャリア教育」？
6. ここまでのまとめ
7. 「地域の取り組み」から考える
8. 2つの事例に共通すること
9. おわりに

0. はじめに②

【資料が多すぎることの言い訳】

- ① 実践に携わる方・一般の方と、研究関心から参加される方のいろいろなニーズにできるだけこたえたいと思ったこと
- ② 申し訳ないのですが、現在、声が出ません。報告は音声読み上げ機能を用いますが、細かい点の事実確認や意図の補足がなるべく発生しないように、資料は詳しくに作りました

【報告の進め方について】

- 「6. ここまでのまとめ」(スライド#55) から報告を始めます(その後も細かいデータの話などは飛ばします)
- 報告で扱わない部分は、ご関心と必要に応じてご参照ください

1. 日本の南米系移民の 置かれた文脈

不安定な雇用とセットの日本での生活

- 大前提: 景気がよいときだけ、または季節変動などで生産量が多いときだけ、人手がたくさんほしく、不要なときはさっさと切れる労働力がほしい日本企業（日本社会）
- 仕事の内容や有無にかかわらず、日本で暮らせる在留資格「定住」をもつ集団である日系人（ほとんどが南米系）
- （当初の意向としては）短期でたくさん稼ぎたい

- 3カ月契約などで、派遣会社の借り上げた住宅に住まわせて、仕事がなくなったらほかの地域の工場に配置

→頻繁な転居

- 渡航のための手数料や航空券代を借金して来るので、返せるまでは、不安定な働き方でもその派遣会社を介して働き続けるしかない

(「顔の見えない定住化」(梶田ほか2005)、「国境を越える雇用システム」(丹野2007))

- 家族の呼び寄せや日本での家族形成

→とくに子育て世帯に関しては、住居については派遣会社への依存を脱して県営住宅などに入居するなど、落ち着く場合も増えた

- しかし、雇用はあいかわらず短期契約、残業代を前提としてアテにする（工場の生産量に直接的に左右される）不安定な生計（丹野2010）

- 契約期間が短くとも、平時はほぼ自動的に更新されるので気になりにくいが...

リーマンショック(2008~)や コロナ禍(2020~)で何が起きたか

- 南米系の人びとの集中的な失業（リーマンショック時にはそれによる大量帰国（樋口2010））
 - もともとギリギリの生活の人が多く、何かあるとすぐに生活が立ちいかなくなる
 - 日々の食事、赤ちゃんのミルクやおむつに困る、電気・ガス・水道が停まる、住居喪失の例も（山野上2021）
 - 「生活のストレスで母乳が出なくなったが、粉ミルクを買うお金がない、もうどうしていいかわからなくて、つらい」
 - 「子どもは小さくてわからないから、「もっとほしい、おかわり」と言うが、そんなに買えないから、ないものは出せない。それが親としてどんなに苦しいことか」
- （コロナ禍における支援活動で聞いた声）

日本社会側の発想：「だからこそ、子ども世代は、正社員に！！」

- 正社員になれるように、日本語を教えよう！
- 正社員になれるように、(日本の)高校や大学に行かせよう！
- 正社員になれるように、意欲を高めよう！
- 「日本人」並みの生活を手に入れられるように、とりあえず、「日本人のように」考えるように教えよう！
- 善意であるのは、たぶんまちがいないのだが...

移民第二世代（日本育ち）の子ども世代は...

- 日本の一定の規模の移民集団のうち、南米系移民の若者は、（フィリピン系とともに）とくに高校・大学進学率が低い（樋口・稲葉2018; 樋口・高谷・稲葉2019）
- 現在は、南米系の家族のあいだでも、日本では子どもは（「子ども」のうちに）高校に進学するのは当たり前という雰囲気になってきているように思われる

- しかし、日本生まれ・日本育ちでも、経済的な事情（就労の必要性）とは別途、学力的に定時制高校などにしか進学できない若者たちも少なくないと思われる
- もちろん定時制高校が悪いわけではないが、一部の集団に学力の不利が集中している傾向がありそう

*量的な検証は難しい（移民第二世代の学力の不利を量的に検証しようとする試みは日本でも増えつつあるが、データの制約が大きい）が、現場の感覚としては総じてそうなっているように思われる

- これは、来日して日が浅い（日本語がまだできない・日本語を学ぶ場がない）子どもの高校進学問題と一部重なりつつも、別の種類の問題。

=別の検討と別の対処が必要

- ただし、本報告ではより広く、日本社会で「大人になる」道のりを考えるなかで、別の視点から考えたい

2. 当事者の若者は、何を考え、
どう生きているのか？

ラファエル（仮名、25歳男性）

*事例の詳細は山野上(2023)

- 日本生まれ、日本（「集住地区」）育ち
- 友達はみんなブラジル人だが、第一言語はみんな日本語
- 勉強には関心がないが、親に言われて定時制高校に進学、中退
- 高校時代からコンビニの店員や運送業の荷物の仕分けなどのアルバイトを経験。中退後は父親と同じ派遣会社を通じて、父と同じ工場で働き始める

- 高校を中退したのは、バイクに2人乗りで学校に乗りつけるなどして、「謹慎くらってばかりで」いやになったから
- 仕事はなんでもいいから稼げれば良いと思っていた
- 工場で働くなかで、「正社員」という待遇の違う人たちがいることに気づく
- 子どもができる・結婚する（相手の女性も日本育ちのブラジル人）

- 自分も「そっちがいい」（正社員になりたい）と考える
- 3年がんばれば正社員登用と言われていたのに、4年目になってから「ブラジル人はダメ」と言われる
- 「差別する会社にはいられない」と、怒ってやめる
- ブラジル人の叔父の紹介で正社員登用アリの、べつの工場へ
- 1年がんばって働き、正社員になる

- いまの会社には、リーダーのポジションに就いているブラジル人もいる、「自分もそうなれたら」と思っている
- 正社員として妻と子どもたちの生活を支えているのが、ラファエルにとっていちばんの誇りであり、働くための動機づけになっている

(妻も基本的に工場で働いているが、インタビュー時、2人目の子どもの育休中)

ラファエルの事例から考えたいこと

- みんなが正社員になるべきだ、そのためにがんばらせるべきだという話ではない

(現実として、「みんな」の分の正規雇用の「いす」があるわけではないことを前提に考える必要がある)

- 男は家族の生活に責任をもってこそ一人前という話がしたいわけでもない

- 一見すると「意欲のない」、高校を中退したり、高校の就職指導にのらない、大学進学も目指さないような若者について、わたしたちは何を知っているのか
- 高校に進学しなかったり、高校を中退したり、高校卒業時に進学もせず、正社員にもならなかったら、もうそれでその若者の人生は「決まった」ものと思いつんでいないか

- 若い人たちがその道に進んだ背景にある制約も、
- そのときの若者たちの思いも、
- いろいろな「選択」を積み重ねながら、どのように生きていこうとしているのかも...
- じつはよく知らずに印象や決めつけて語っていないか
(「無力な被害者」像であれ、「意欲に欠ける若者」像であれ)

3. 社会のマジヨリティの考えと、 当事者の若者たちの現実のズレ

「大人への道のり」の個人化・不安定化・流動化という現実

※ヨーロッパの「大人への移行期」研究が指摘してきたこと

- 価値観の多様化、社会の「個人化」(Beck 2002)
- そもそも、どうなることが「大人になる」ことなのかも、はっきりしなくなってきた
- 産業構造の変化、グローバル化→「学校から仕事へ」の道のりの不安定化
- 昔は、とりあえず働き始め、周囲の人に合わせて一直線の道を歩いていけば順々に「大人になる」ことができた

- しかし、いままでは「学校から仕事へ」「家族形成」などは順番ではなくバラバラに進行する
- 仕事をやめてフルタイムの教育に戻る、離婚して親元に戻るなど、ときにかつての想定とは逆走しながら、若者たちはそれぞれに大人への道を模索する（「ヨーヨー型の移行」、Walther et al. 2002）
- ゆえに、仕事に就けばそれですべて安泰な（若者の社会統合が果たされる）わけではない

- 一見すると「自由」になった若者たちの大人への道のり
- しかし、不利な属性（社会階層、ジェンダー、人種／エスニシティ）を有する若者たちが不安定な道をたどる傾向は強い
- 個人が進路を「選択」していかなければならない、そしてその「選択」の結果は自己責任であるという風潮の強化（ファーロング&カートメル1997=2009）

前提とされ続ける「標準的で正しい」大人への道のり

- 政策（社会政策、若者政策）を動かす論理
- 不利な属性を有する若者たちを「まともな大人」に仕立て上げるには、ともかくなんでもいいから働かせることだ！
- 仕事に就けば、家族形成もできるし、立派な市民になれる
- 仕事がないと言うならば、仕事に就けるよう自己責任で学歴を高めるべきである（イギリス：「アスピレーション政策」）

- 現実に変化しているのに、若者を対象とする政策は「標準的で正しい道のり」を前提に、そこに戻そうとし続ける

(※ただし「標準」や「正しさ」の想定は、社会によって異なる)

- 背景にあるのは、若者の高い失業率と、社会保障の切り詰め
- しかし、安定的な大人への道のりが狭くなっている以上、意欲や能力を高めればみんながその道を歩めるというわけではない(しかも若者たちはそれに気づいている)

- 不利な層の若者を対象とした施策は、その層のなかでも支援に適合的な若者たちをふるいわけ、その支援にすらのれなかった若者たちに「負け組」のレッテルを貼る
- 若者たちは、やる気をなくすか、自己の尊厳を賭けてそのような社会に反発する

⇒「包摂」の意図とは逆に、結果として若者たちを社会的排除のほうへと導いてしまう(Walther et al. 2002; Blasco et al. 2003)

- 不利な状況のなかで大人になる若者たちを支援したいと本気で考えるならば:
- 若者たちが「何をしないのか」「何をちゃんとやっていないのか」「何が早すぎるのか／遅すぎるのか」(早すぎる離学、遅すぎる就職、早すぎる家族形成、遅すぎる結婚etc.)と問うのではなくて、現実に関何をしているのか、それは何を意味するのかに注意を向ける必要がある(Walther et al. 2012: 234)

4. 日本社会で大人になるための
「標準的で正しい」道のりとは？

① 「3月31日に卒業して、 4月1日から正社員!!」

- 在学中の就職活動からの、新規一括学卒採用による卒業直後の「就社」
- 日本では常識とされているが、世界的にはまったく普通ではない
- 日本の特殊な「間断のない移行」とそれを支えてきた「学校経由の就職」(荻谷1991; 荻谷ほか編2000; 本田2005)

- 正社員になるために...
- 逆算して学校でまじめにがんばり(勉強だけでなく、欠席や遅刻をせず、何事にもまじめに取り組む)、
- 大学生の就職活動の場合は、学生時代に何かに力を入れてアピールポイントをみがき、
- 正社員になれたらどんな環境でも文句を言わずしがみつ
- く
- これが「標準的で正しい」大人への道のり

- 高校受験、高校における進路指導（就職指導または進学）、大学受験と大学における就職活動という一連の流れ
- 「分相応」へと人びとをふりわけながら、そこで若者たちをがんばらせ続ける
- 正社員になれなかったり、または正社員でも有名企業や、希望する業種の会社に入れなかったのは、「自分の能力や努力が足りなかったから」と人びとを納得させていくプロセスでもある

②「新卒採用で正社員になる。正社員になったら結婚して、子どもを持てる」

- 確かに、以下の点は日本社会において現実

①新卒時に正社員にならないと、全体的な傾向としては、その後、正社員になりにくい(*あくまでも傾向であり、なれないわけではない)

②正規雇用と非正規雇用では、賃金はじめ、待遇に大きな格差がある(とくに大企業)

- しかしそれは、「能力や努力」の差により生じる「当たり前で仕方のない」ことなのか？

- 世界的にみてめずらしい「メンバーシップ型雇用」と「「正社員」体制」（濱口2009, 2010, 2013）
- 諸外国では、職務に応じて、空きができたときに、その職務に適した能力をもつ人が雇用される（「ジョブ型雇用」）
- 日本では、卒業したばかりの人をとりあえず「正社員」として会社のメンバーに加えたいかどうかを判断する

- 雇われる側には、終身雇用（長期雇用）、年功賃金など日本的と言われる特典がついてくる
- メンバーシップ型の雇用は、会社としての一体感(?)や生計の安定をもたらす一方で…
- 男性の「社畜」化（命じられれば24時間働く?、全国どこにでも単身赴任…）
- そんな男性を「陰」で支える妻・母親役割の固定（女性のキャリアの制限）

- 「「正社員」体制」：本来は政府が担うべき生活保障の責任を、社員を雇用する企業に担わせる
- 正社員になれなかった、正社員であり続けられなかった人は、「能力」や努力が足りないのだから、生活が立ちいかななくても、家族形成ができなくても仕方ないという正当化につながる（そもそも職務に応じた能力という発想ではないので、何をもって「能力」とみなすのかはあいまいであるにもかかわらず）
- 正社員になれないと「人生、詰み」という感覚

③ 日本的な「家族・教育・仕事の循環」 に組み込まれる

- 戦後の日本社会で形成された特殊な家族・教育・仕事の結びつき（「戦後日本型循環モデル」本田2014）
- 誰もががんばれば手に入れられる「豊かな生活」のイメージに向かって駆動される循環：
- 正社員として働く父親が、家族の生活を支える
- 家族（母親）は子どもの教育にお金と熱意・時間を注ぐ
- 教育を通じて新卒採用で企業に人が供給される

循環モデルの問題 ①政府の役割の後退

- 政府は本来すべきことをあまりしない（高度経済成長を背景に、それでなんとなく成り立っていた）
- 正社員と家族の生活保障は企業に委ね、政府による直接的な費用負担（家族手当、子ども手当、教育費、住宅の供給や住居手当など）は抑える
- 高齢者の介護や子どものケア（保育）と教育は家族の内部で女性がかんばることになっているので、これも家族に任せる

循環モデルの問題点 ②息苦しい

- 「正しい生き方」「正しい家族」イメージの押しつけ:
- 男は男らしく(外で稼いで家族の生計を支えよ)、女は女らしく(働く夫を支え、子どもを教育せよ)、子どもは子どもらしく(勉強に励むべし)→はみだすことが許されない
- 働かない男はダメ、女は嫌でも結婚するしかない、子どもが「学校に行きたくない」のは論外
- 大人への道のりにおける日本的な年齢主義(スライド#82)により、一時的に休むことも許されない

循環モデルの問題点 ③

格差の正当化、自己責任化

- 正社員（・その家族）と、それ以外の人をあいだの生活保障の格差
- その格差を正当化する教育（子どもの努力+「能力」、母親の育て方）
- 循環モデルが崩れ始めても、そのこの循環に乗れない個人に責任が押しつけられる（政府に頼らない形でモデルが成り立ってきたので、政府が支出すべきという発想になりにくい？）

不安定になる「標準」と「正しさ」

- 1990年代（バブル崩壊）以降、「就職氷河期」と呼ばれるように、効率的・安定的だった日本的な「標準的で正しい」大人への道が崩れ始める
- 循環モデルが機能し、効率のよい「大人への道のり」が安定していたのは、その時代にしかなかった特殊な条件が重なっていたから（産業構造の変化と高度経済成長、人口動態など）
- 過去のように戻したいと思っても、前提がちがうからそれはもう無理

旧来型の「包摂」 そのものの息苦しさと、 そこに向かうための競争の息苦しさ

- 「昔はよかった」と（一部の大人は）言うけれども...
- 生活の安定とひきかえに、「はずれること・はぐれること」を許さず息苦しかった日本社会の「標準的で正しい」大人への道のりや、「正しい生き方」「正しい家族」像
- 狭くなってしまった昔ながらの大人への道のりを「正しい」ものと見なし続けて、はずれずに、はぐれずに、他人を蹴落としてでも何とか乗り続けるようにと若者を焚きつける社会は幸せか？

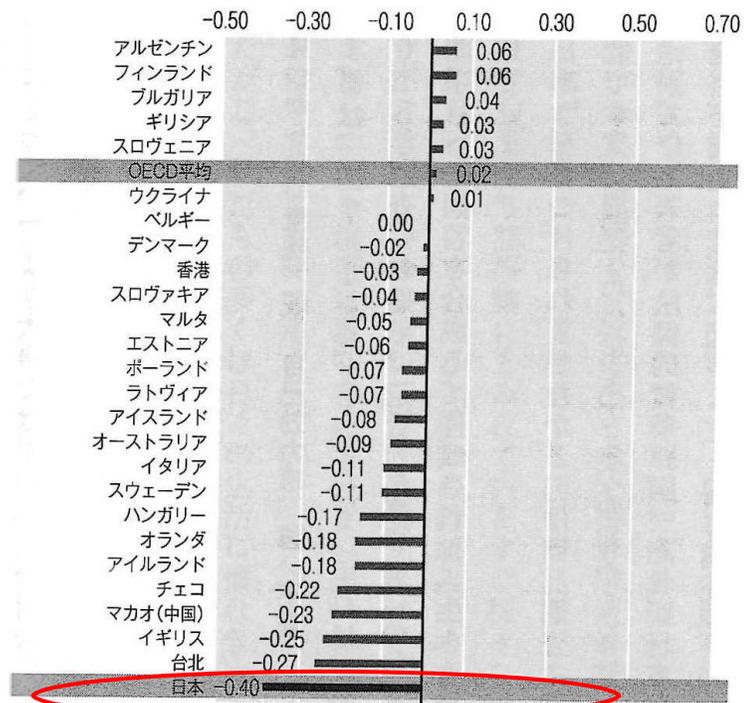
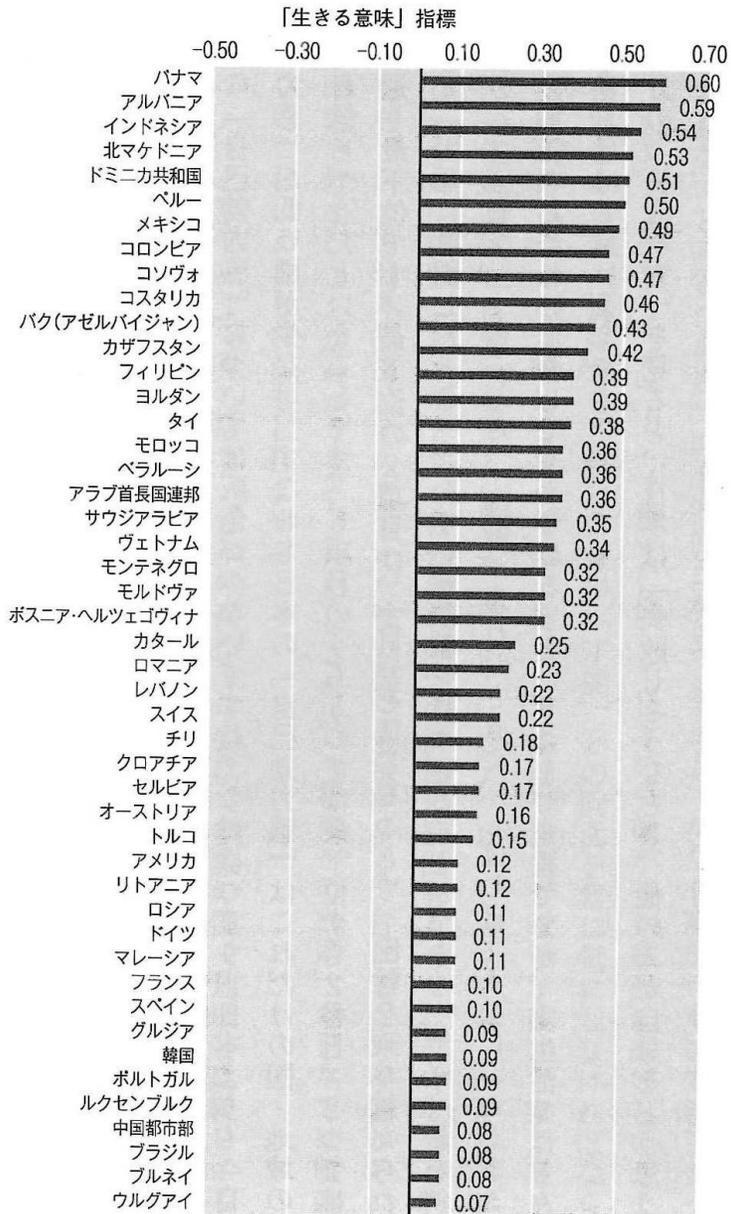


図 7-1 「生きる意味」の国際比較
データ出所：OECD, PISA 2018 Database, Table III.B1.11.14.

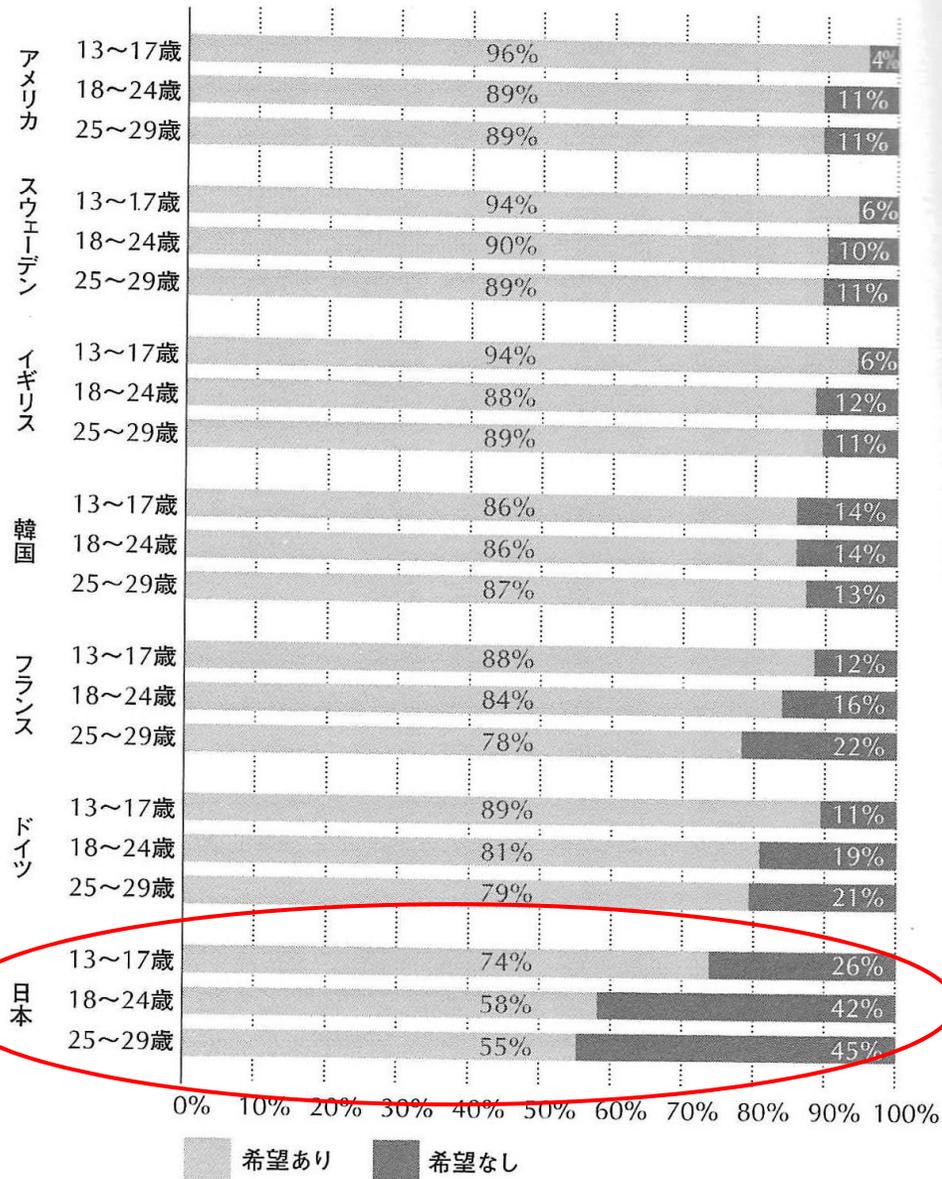
- OECDの2018年PISA調査(15歳、日本では高1対象)
- 「生きる意味」についての若者の意識
- 日本の若者は、諸外国の若者に比べて「生きることの意味」を見いだせない

• 「私の人生にははっきりとした意味や目的がある」「人生において満足
のいく意味を見つけた」「私の人生に何が意味をもたらすかについて、
はっきりとした感覚をもっている」という3つの質問の回答を合成したも
の

• 質問項目は以下から取得(p.54)、報告者が訳したもの

• https://www.oecd.org/pisa/data/2018database/CY7_201710_QST_MS_STQ_NoNotes_final.pdf

図表1-2
自分の将来に希望があるか一年齢期別



- 内閣府、『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』（2013年実施）
「あなたは、自分の将来について明るい希望を持っていますか」という質問
- 日本の若者は、自分の将来に希望を見いだせない割合が高く、しかも18歳以降は希望をもてない人の比率が増加する

5. 対策としての 「キャリア教育」？

ではどうするか→「キャリア教育」？

- 大人になる道のりの不安定化・流動化：
- 海外においては若年失業率の高さが問題とされ、日本では時期は遅れるが、「フリーター」や「ニート」が社会問題化される
- 景気の動向や産業構造の変化により仕事が減っていることや、労働環境の劣悪化を、若者たちの「能力」（「エンプロイアビリティ」「社会人基礎力」）や意欲の問題にすりかえようとする傾向

何を競っているのかよくわからない競争

- その「能力」のなかみは、「能力」と呼ぶべきものなのか怪しい(児美川2011; 本田2020)
- 日本の「メンバーシップ型雇用」では、どのような能力を身につければ仕事に就けるのか(会社を選ばれるのか)が、そもそもよくわからない
- じつは結果からみてうまくいった人を「能力が高い」と見なしているだけなのだが、「成功」の秘訣となる「能力」を高めなければと、みんな不安になる

- 具体的な職務に必要な能力を鍛えるという方向性がないままの、人気の業界・人気の企業への就社のための競争
→「自分探し(自己分析)」と「やりたいこと」への焦点化
(妹尾2023)
- 最近の大学生の就職活動では「ガクチカ」も流行、正社員になるために「学生時代に何かに力を入れる」という本末転倒が学生に受け入れられてしまう(学生にしてみれば、現実として受け入れるしかない)

「やりたいこと」の焚きつけと格差

- 進路多様校においては、「やりたいこと」を煽るだけ煽って、現実をみて冷却するような機能が働きにくい（荒川2009）
- 「自分探し」から煽られる「やりたいこと」の実現に向けた若者たちの教育費はだれが負担するのか（結局は経済格差が反映される（岩田2015））
- 「やりたいこと」の「失敗」のリスクとコストをだれが負うのか→結局は、資源の少ない層の自己責任論につながってしまいうさ

日本の「キャリア教育」への疑問

- 学校教育を通じて順当に威信の高い専門職（医師・弁護士など）に就いていく層には、「キャリア教育」はあってもなくても関係なさそう？
- 周囲からの評価を気にしながら「人気の企業」に就職したい層の（「普通の」??）若者にとっては、もしかすると主観的な苦しさを強めているだけかもしれない
- 「標準」ルートを歩みにくい、資源を欠く層の若者にとっては、あまりよい効果がなさそう

それに加えて...移民第二世代の 若者たちの多様な「成功」観

- アメリカの移民第二世代研究で近年次々と指摘・検証されていること:
- 移民の若者たちは、二つ(以上)の社会にふれながら育っている(生まれ育った場所にかかわらず、家族や地域の移民コミュニティを介して、または母国訪問を通じ、異なる社会との接触がある)

- どのような生き方を「成功」とみなすのかは移民集団によって異なる
- アメリカ社会における「成功」(高い教育達成→高い職業達成)と結びつきやすい成功観(+エスニックな資源)をもつ集団もあれば、そうではない集団もある

※多様な成功観の形成は、移民集団の編入様式、トランスナショナリズム実践や準拠集団の差異などで説明されており、文化本質主義的な議論とは一線を画している。このような議論の詳細については、山野上(2022)参照

日本の文脈においても...

- 移民第二世代の若者たちは、たとえば以下のような感覚をもっている可能性がある:
- 「正社員」の何がいいのかそもそもわからない、人生いつ何があるのかわからないのに、終身雇用って大事?
- 不安定雇用でも、母国に比べれば十分豊かである
- 自分個人の「成功」よりも、家族の幸せのほうが大事
- 人生、いつだってやり直しがきく(15歳や18歳での進学や、卒業時の就職にこだわる必要はない)

ついでに、親世代について

- 移民第一世代（親世代）は、それぞれに生きてきた時代のその社会で身につけてきた考え方、または現在の母国での生活を参照しながら自分や子どもの生き方を考える
- 社会的な文脈が異なることで、日本社会のマジョリティの「常識」を前提とする日本人側からは、「無関心」な親にみえてしまうことがあるが、そうではない
- 「なぜそう思うのか」と聞いてみないとわからないことがたくさんある

6. ここまでのまとめ

まとめ①

- 南米系の移民は、日本社会にとって「都合のよい」労働力としての役割を担ってきた
- それゆえに雇用や生活が不安定で、何かあると困窮状態に陥るリスクが高い
- そういう親世代の姿をみてきた日本社会のマジョリティ側は、「子どもはそうならないように」、日本社会の「標準的で正しい」大人への道のりへとなんとか導こうとする

まとめ②

- 他方で、「大人であることの意味」「大人になるための道のり」は、不安定化・流動化している現実がある
- 社会のマジョリティ(制度・政策を作ったり、制度のなかで教えたりする側)は、過去のものになってしまった「標準的で正しい」大人への道のりが、今でも有効だと思っているが、すべての若者にとってそうではなくなっている

※今でもマジョリティにとっては、「よい高校」→「よい大学」→「よい企業」の正社員というルートは残っているので、そのルートに乗らない／乗れない人たちのことがよくわからない

まとめ③

- 不安定化・流動化のなかで、とくに不利にさらされる若者たちを「標準」に引き戻そうとする対応は、うまくいかない
- 若者の現実やニーズをみない「包摂」策には、善意の意図とは逆に、選別・序列化・排除へとつながる危うさがある
- 「包摂」(一元的な「よい生き方／正しい生き方」への同化、そこに至る道筋の一元的序列化)そのものがもたらす息苦しさも日本社会の問題としてある

まとめ④

- 移民の若者たちは、二つ（以上）の社会にふれながら育っている（生まれ育った場所が日本でも、家族や地域の移民コミュニティを介して、または母国訪問・一時帰国を通じ、異なる社会との接触がある）
- そのため、日本社会の「常識」にとらわれない生き方の指針や、考え方をもっている場合も多い
- 前提を共有しないので、日本社会のマジョリティが考える「キャリア教育」は響かない

7. 「地域の取り組み」から考える

「地域」で取り組むことの意味

- 学校教育（マジョリティ）の論理から距離をとることが可能
 - 空間的には学校の外であっても、学校教育の論理のなかで活動する団体も多い（おそらくは、全体の傾向としてはそのような団体のほうが多い）が、今回取り上げる2つの事例は、いずれも「地域」で取り組むことの意味を活かしているところ
- 子ども・若者や家族の生活空間との近さ

- 制度の枠組みに縛られない

- 〇年で卒業、〇年生ではこれができるようにならないといけない、「こういうタイプ」の子ども・若者は対象から除外しなければならない...などの条件にとらわれなくてよい
- 支援者側の多様性も高めることができる
- もっとも不利な条件のなかで育つ若者たちにアプローチできるのは制度の外の柔軟な取り組みであることは、ヨーロッパの移行期研究などでも強調されている

※ファンディングの枠組み(事業資金の性格)に縛られることはあるが、それはお金を出す側(地方自治体や助成団体など)の匙加減次第のところが多い。

- 以上の点を踏まえて言えること:

→「地域」の取り組みのなかでは、見ようと思えば、移民の子ども・若者や家族の「文化」が見える(ただし、見ようと思わなければ、見えない)

- ここでいう「文化」とは、お祭りや食文化などを指すものではなく、考え方やふるまいの基礎となる価値の体系

- ただし「文化」は、本質的なものではない(初めからある、固まって動かないものではない)

実践のなかの場面から考える

- 事例となる2団体
- 東海地方、いわゆる南米系住民の「集住都市」（製造業が盛んな地域）
- 1990年代、地域で南米系住民が突然に増加、それに対応する形で活動をはじめ（いずれもNPO法人化は2000年代前半だが、活動の萌芽は1990年代後半）
- その後、南米系以外の住民も増えたために、現在では南米系に特化した活動をしているわけではない

場面①～③の背景： NPO法人トルシーダについて

- 活動の中心は愛知県豊田市・(お隣の)みよし市
(*そのほか、愛知県内の各所で活動)
- 豊田市について:
- 言わずと知れた、日本を代表する自動車メーカーの企業城下町
- 総人口約42万人、外国籍住民18,891人
- (2023年5月1日、「豊田市外国人データ集」 <https://www.city.toyota.aichi.jp/shisei/tokei/sonohoka/1004767.html>)
- 日本の学校に通っていない子どもたちへの支援から始まり、
草の根で活動を展開してきた

- 子ども・若者への教育活動が中心にあるが、大人向けの日本語教室も実施
- コロナ禍では団地内での生活相談対応・食料配布に精力的に取り組むなど、そのときどきのニーズに応じた多様な活動をおこなう
- 集住地域の団地を拠点としたまちづくりやコミュニティ形成にも関心をもっている

場面①～③の背景： 進路応援・開拓ガイドブック

- 愛知県の委託を受け、NPO法人トルシーダにて、外国につながる子どもやその支援者向けの進路ガイドブックを作成（2021年度の事業）

「外国につながる子どもたちの進路開拓・進路応援ガイドブック」（以下、愛知県HPよりダウンロード可能）

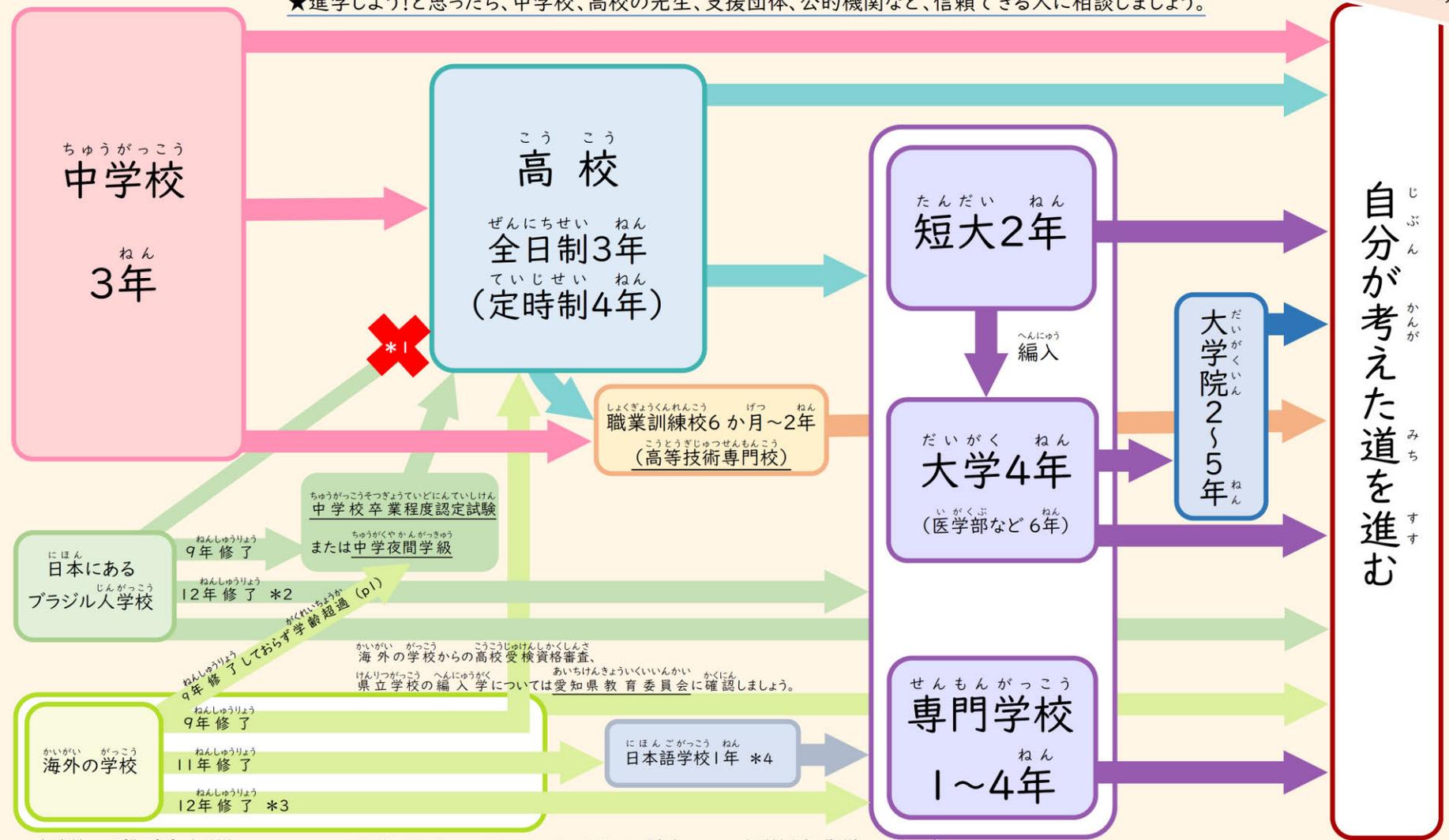
- <https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/shinro-gidebook2.html>

- 「ガイドブックづくりを手伝ってほしい」とトルシーダから相談されて、報告者（山野上）も参加（インタビューへの参加、打ち合わせへの参加、一部のページ原案の作成など）
- ガイドブックを作るにあたって、いろいろなルーツや経験をもつ若い人たちにインタビューを重ねた
- インタビューの内容はコラムとしてガイドブックに掲載されているので、ご関心のある方はぜひダウンロードしてご覧ください

進路フローチャート

★進学しよう!と思ったら、中学校、高校の先生、支援団体、公的機関など、信頼できる人に相談しましょう。

はたらきはじめからでも、いつでも学びなおしはできます!



*1 愛知県では公立高校に出願できません。*2 高等学校相当として指定された外国人学校を確認しましょう。受験資格は大学ごとに問い合わせてください。
*3 「日本の大学入学資格について」を確認しましょう(日本語、English)。受験資格は大学ごとに問い合わせてください。*4 準備教育課程を持つ日本語学校を確認しましょう。

場面① 多様な大人への道のりを現実として受け止める

- フローチャート作成時に話し合ったこと
- 進学がゴールでもないし、就職がゴールでもない
- いちど働いたあとで、学校に戻ってきてもいい（実際にそういう若者はたくさんいる）→右上のメッセージ「働きはじめてからでも、いつでも学びなおしはできます！」

- 出産・子育てを経てからまた勉強してもいい（若年出産を奨励するわけではないが、そういう生き方があるのもまた現実）
- いちばん右側に、何を置くか→
- 担当者のあいだで考え、話し合った結果として「自分が考えた道を進む」

場面② 「無事に出産できてよかった」

- 今年のNPOの総会で事業の実施状況を振り返るなかでの、ひとりのスタッフの発言（進路ガイド担当者ではない人）
- 教室に通っていた17歳の女性が出産した
- 時折、赤ちゃんをベビーカーに乗せて教室に寄ってくれる（※この教室は、彼女の暮らす団地のなかにある）

- 「まずは、無事に出産できてよかった」
 - 「いつか彼女がまた次のステップに踏み出したいと思う日が来れば、それに寄り添える場でありたい」
- 地域のなかにあることに加え、無事の出産をとともに喜べる姿勢だからこそ、当事者の若者は出産後も教室に立ち寄る（「まだ子どもなのに子どもを産んで…」というような、よくありがちな非難めいた雰囲気があったくない）
- 見守りや寄り添いが可能となる

がいこく
外国につながる子どもたちの
しんろ かい たく

進路開拓ガイドブック

つなぐ・ひらく・^{みらい}未来2



場面③ 表紙に込められた願い： 「ひとりで進路を考えるんじゃないくて」

- 進路ガイドの表紙はひとまずデザイナーさん任せだったが、最初に出てきた案は、最終版の下半分をモチーフにしたもの
- おしゃれなカフェで甘そうな飲み物を片手に、進路について、ひとりで考えながら手帳に書いているイメージ

- 原案をひとめ見たトルシーダ代表からの違和感の指摘:
- 「ひとりで進路を考えるんじゃなくて、みんなと一緒に考えている雰囲気にしてほしい」
→飲み物が増え、コーヒーをもつ手も加わることで、対面に人がいて一緒に話している印象に
- 「進路ガイドも、ひとりで読むのではなくて、友達や支援者や親と一緒に読んでほしい」(※「ポイント版」は翻訳つき)

場面④の背景： NPO法人可児市国際交流協会について

- 岐阜県可児市：総人口約10万人、外国籍住民8827人
(2022年12月末、在留外国人統計)
- 地域の多文化共生の拠点として多様なプログラムを展開
- 学齢超過の子どもの高校進学のための教室など、子ども・若者向けの事業に力を入れている

場面④の背景： キャリア教育と映画づくり

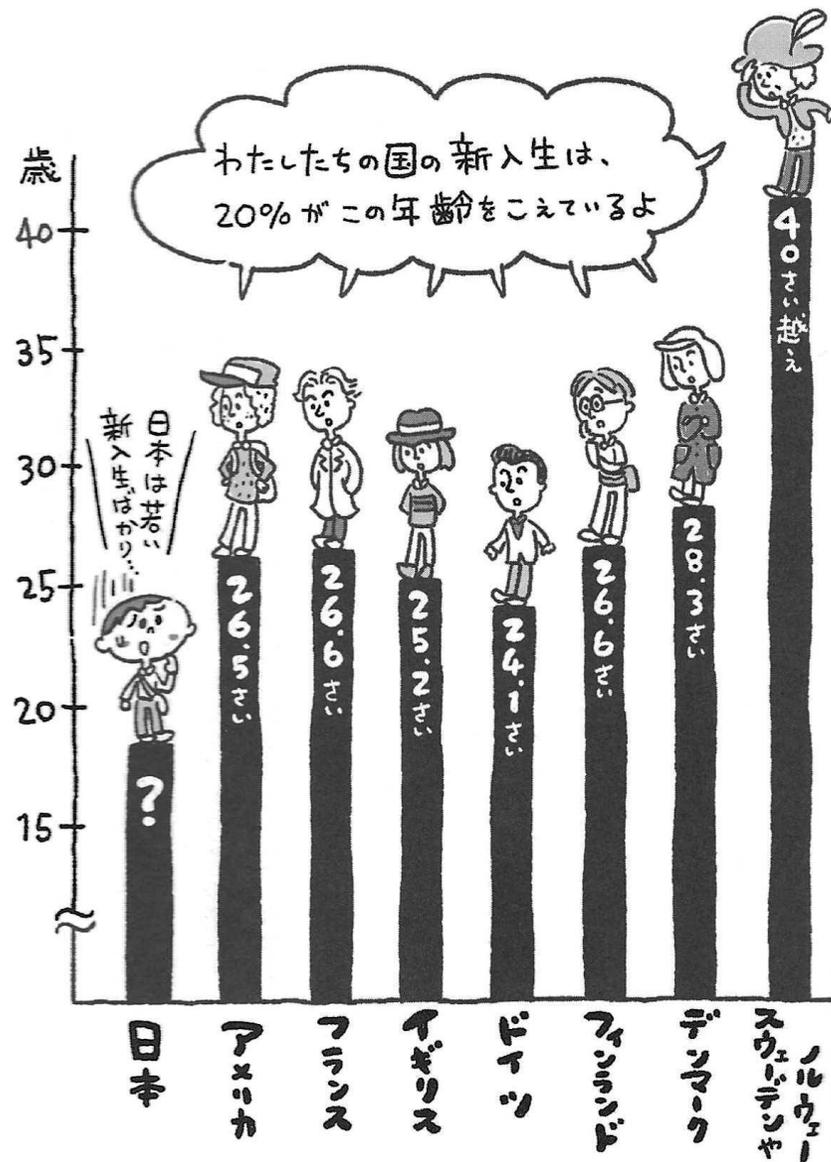
- 若者世代を対象とした「キャリア教育」の一環として、日本語学習や受験指導に留まらない、多様な課外活動を実施
- 映画づくりのプロジェクト：身体を大きく使って巨大な絵を描く表現活動なども組み合わせ、必要に応じて通訳も介しながら、日頃の教室活動のなかでは十分に聴き取れない若者たちの思いを引き出す

場面④「ブラジルで、48歳のおじさんが大学に入ったの」

- 若者たちと一緒に制作した映画 Journey to be Continued のワンシーン
- 中卒で、高校進学しなかったブラジル人の若者（女性）の発言（日本語）
- ブラジルに暮らす48歳の叔父が、やりたいことができたから、大学に入って、その関係の仕事に就いたという語り

- 「ブラジルでは若くない人が大学に行くことは普通」
- 「やりたいことが見つかったときに大学に行く、それでいいんじゃない？」
- 日本の「常識」で固まっていたら、負け惜しみや言い訳として聞き流される／無視されるような発言だが、じつはそうではない

日本の大学の「18歳主義」の特殊性



(矢野2011: 103)

- OECDデータでは、大学の新生100人を若い順に並べたときに、80人目も18歳台なのは日本だけ(2009年)
- 最新の数値でも、新生生の年齢の平均値が「18」になっているのは日本だけ、25歳以上の新生生が1%しかいない(特殊な)例としてOECDの報告書本文でも言及されている(OECD2023: 218)
- OECD *Education at a Glance 2011*: 316, Table C2.1. Entry rates into tertiary education and age distribution of new entrants (2009) *矢野2011と出版年が近い報告書のデータを参照したが、数値は矢野の引用したものと一致しない(OECDの統計集のなかでも、異なるデータを参照しているとみられる)。ただし、全体としての傾向は似通っている
- OECD *Education at a Glance 2023*: 223, Table B4.1. Profile of first-time entrants to tertiary education (2021) and share by level of education (2015 and 2021)

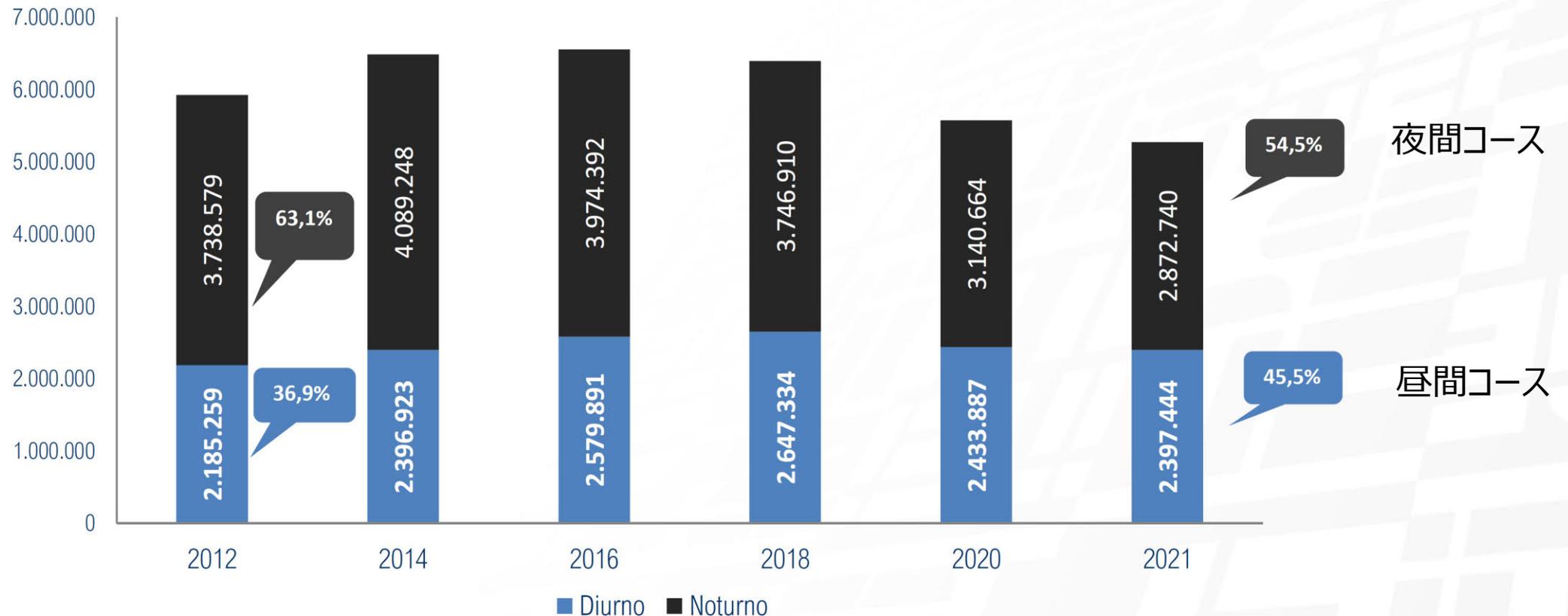
- 「日本の18歳入学は、就職の新規学卒一括採用という雇用システムに連動しています。就職のためには2浪が限界だ、とまことしやかに語られています。進学と就職にみられる1歳刻みの年齢主義が、日本の社会システムの根幹を規定しています。そのために、若者の生活が、どれほど息苦しくなっていることか。」(矢野2011: 101)

ブラジル社会では① 高等教育の機会

- ブラジルの大学の新生生の年齢についての統計は出ていない(OECDデータ集ではデータ欠損の扱い)
- ただし、ブラジルでは初等中等教育でさえ、大人になってから参加する人がそれなりの数いることを踏まえれば、大学生の年齢も当然高いと考えられる
- しかも、ブラジルでは、働きながら学ぶ人のために設置された大学の「夜間コース」に通う人のほうが多い(次ページグラフ)

ブラジルの大学（通学制課程）の夜間／昼間コース在籍者数・比率
（ブラジル教育省2021年統計）

Gráfico 38. Número de matrículas, em cursos de graduação presenciais, por turno – Brasil 2011/2021.



Ministério da Educação, Instituto Nacional de Estudos e Pesquisas Educacionais Anísio Teixeira (INEP), 2022, *Cenço da Educação Superior 2021 Divulgação dos resultados*: 54

- 「48歳のおじさんが大学に入った」ことが「ブラジルでは普通」と可見の若者が語ったのは、ブラジル社会についてのわりと正確な認識を反映している
- 日本の工場などで働きながら、帰国したときに役立てようと、ブラジルの大学の通信制課程で学んでいる人たちもいる（若い人に限られない）
- マジョリティではないものの、見聞きする限り、日本で働いて貯めたお金で帰国後に進学する例も、すごくめずらしいわけではない（若い人に限られない）

ブラジル社会では② 基礎教育の機会

- 貧富の差が大きく、地理的にも広大な国
- 1960年代まで続いた軍事政権の影響も背景
- **基礎教育**（日本の小中学校、現在のブラジルでは9年）や**中等教育**（日本の高校、現在のブラジルでは3年）が、日本ほどに均質に急速に普及しなかった

→子ども・若者時代に学校教育の機会を逸した人、非識字者が多い（そのような文脈のなかで、パウロ・フレイレのような人が出てくる）

- 結果として、学びたいとき、学べる条件ができたときに、いつでも学べばよいとの考え方が広く根づく
- 成人教育（青年成人教育）の機会も、少なくとも都市部においては質・量ともに充実しており、日本とは感覚が全く異なる

◎報告者がインタビューしてきたなかでも：

- 「お母さんは子どもの頃、貧しくて高校に行けなかった。自分が小学生の頃、お母さんはがんばって高校で勉強していて、ときどき「ちょっと教えてよ」と言われた」「そんな母を尊敬している」
- 日本で高校を中退し、いまは働いていたり、子育てをしているが、「いつか高校を卒業したい」と、ごく自然に語る若者たちもいる

◎実践的な関わりにおいても：

- 「本人が行きたくないなら、無理にいま高校に行かなくてもいい」「いまはお金がないから、とりあえず働いてほしい」というブラジル人の親の発言はたまに聞かれる（一般的とは言えないが、すごくめずらしいとも言えない）
- その背景には、自分や身近な人が働きながら高校（または基礎教育課程）に通ったという経験や、それがそんなに「おかしいこと」「劣った生き方」と見なされないブラジル社会の考え方がある

※こういう場合、実践的にどう介入するのがよいかは、ケースバイケース

- ただし、やってはいけないこと：「教育に無関心」「子どもに無関心」「お金のことしか考えていない」と「ダメな親」レッテルを貼って非難したり、切り捨てたりすること

8. 2つの事例に共通すること

日本社会の「標準」や「正しさ」との 距離のとりかた

- 「標準」のルートを歩まないことが日本社会においてどれほどの不利につながるのかは、切実に理解されている
- 誤解のないように添えておこなうならば、いずれの団体も、日本語教育や高校進学に向けた教科指導にも極めて熱心で、若者たちの選択肢を広げようと日々努力している
- 不利を生じさせ、維持させる日本社会への怒りもある（無責任に移民の若者たちの「自由な生き方」を礼賛しているわけではない）

- しかし、目の前の若者たちは「標準」のルートから外れながら、それでもなんとか生きていこうとする
- 地域で制度に縛られない活動をする限り、あえて切らなければ関係性は続いていく
- 若者たちと出会い、顔の見える関係性を築いてしまったからには...
- 「高校に行かない人や中退した人の面倒はみません」、
「学校の進路指導にのらない人や、若くして妊娠・出産した人はもう勝手にやってください、知りません」と突き放すことはできない

- 「日本社会でなんとかうまく生きてほしい」という願い
- しかし、目の前の若者たちの存在や生き方を否定したくはない
- ギリギリの苦しいバランスのなかで、迷い悩みながら、日本社会の「標準」や「正しさ」を問う視線が鍛えられる

具体的には...

- 「18歳（または15歳）で人生が決まる」という日本社会の発想を当然視しない
- 進学や新卒時の就職を人生のゴール（生きる目的）と同一視しない
- 日本の年齢主義に沿っているかどうかや、「標準的で正しい大人への道のり」（卒業→正社員就職→家族形成）の順番を守っているかどうかで若者やその親を評価しない、切り捨てない

- 移民の若者たち（とくに、そのなかでも「標準」ルートを歩まない若者たち）やその親が、自分たちと異なる考え方をもっている可能性を十分に認識し、とりあえずいったん受け入れる（そのうえで、どう対応するのかはケースバイケース）
- 日本社会の考え方が「当たり前」のものではないと気づいている
- 日本社会の「常識」に則っていないいろいろな生き方を序列化しない

相手を知り、理解するために声を聞く

- 「鶏か卵か」ではあるが、相手の声を聞くから日本の「常識」が相対化され、日本の「常識」を当然視しないから、耳を傾ける姿勢になる

→若者たちやその親に、「この人たちは、自分をそういう目で（逸脱者、劣った存在として）見ない」と信頼される

※タテマエ的に「当事者の声を聞く」と、自分たちにとって「都合のよい」、自分たちの思う「正しいロールモデル」になる声だけを聞き取ってしまう（悪ければ、当事者の選別・序列化や、「声を聞いてます」というアリバイづくりのための搾取に終わってしまう）

- そのうえで、声を聞くための方法も模索されている
- 参加型の手法としての映画づくり（可児市国際交流協会）、進路ガイド作成のためインタビューの技法をみがく（トルシーダ）
- 方法ありきでは意味がない（方法よりも先に信頼関係が必要）
- しかし、方法を工夫することで聞き取れる声もある

若者たちとの関わりを通じた支援者側の学習と「学びほぐし」(Unlearning)

- 支援者から若者への一方向的な「教育」に留まらない、双方向的な学習(気づき)と変容の過程
- 事例であげた2団体には、映画や進路ガイドブックなどの形を通じてそれを発信する力もある
- ここまでの発信力をもつのはそう簡単ではないが、「気づきと変容(学びほぐし)」の過程は、程度差はあっても、おそらく移民の子ども・若者と関わる多くの現場(とくに「地域」における実践)で生じている

共同性の（再）構築への志向性

- 個人化の進む社会のなかで、大人への道のりを支える共同性（仲間関係）の重要性（乾2012）
- 事例の2団体では、意識的ではない（感覚的な）部分も大きいとみられるが、いろいろなレベルでの共同性の（再）構築にも価値が置かれている
- 例）可児市国際交流協会の参加型の手法を通じた仲間づくりの要素、トルシーダの進路ガイドの表紙に込められた願い

共同性の（再）構築への志向性

いろいろなレベルでの共同性：

- 移民の若者どうしの関係性（同じルーツとは限らない）、
「日本人」の若者との関係性
- 若者と家族・移民コミュニティ
- 若者と支援者、地域社会
- 若者を取り巻く（広義の）社会

→若者たちのアイデンティティ形成の基盤や、周囲の人たちとの関係性を豊かなものへと耕していくとともに、支え合うことの意味の問い直しへとつながる

9. おわりに

- 不利な層の子ども・若者を対象とした実践は、どのように「わたしたち」並みに教育するかという発想に陥りがち
- しかし、「わたしたち」が前提としてきた「標準的で正しい」大人への道のりや、それを支える社会のモデルは変容していて、そこに若者をつっこもうとするような対応は、もううまくいかない(しかも、不利な層以外の人たちにも息苦しい社会になってしまう)
- 昔ながらの「標準」への回帰ではなく、いまとは異なる社会の構想を→その芽はきっと「地域」の現場にある

参考文献

- ・ 研究者以外の参加者も多いと思うので、学術書よりも読みやすい物（一般書や若い人向けに書かれた物）がある場合は、それを優先的に参考文献にあげています。読みやすい物には横に★をつけてあります
- ・ 日本語訳を参照した文献は日本語文献に、英語版を参照しているものは（訳書があっても）英語文献に分類しています
- ・ 荒川葉、2009、『「夢追い」型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂。
- ・ 乾彰夫、2012、『若者が働きはじめるとき——仕事、仲間、そして社会』日本図書センター。★
- ・ 岩田美香、2015、「子どもの貧困から見た「子ども・若者支援」」原伸子・岩田美香・宮島喬編『現代社会と子どもの貧困——福祉・労働の視点から』大月書店、61-77。
- ・ 梶田孝道・丹野清人・樋口直人、2005、『顔の見えない定住化——日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会。
- ・ 荻谷剛彦、1991、『学校・職業・選抜の社会学——高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出版会。
- ・ 荻谷剛彦・菅山真次・石田浩編、2000、『学校・職安と労働市場——戦後新規学卒市場の制度化過程』東京大学出版会。
- ・ 児美川孝一郎、2011、『若者はなぜ「就職」できなくなったのか？——生き抜くために知っておくべきこと』日本図書センター。★

- 鈴木賢志、2015、『日本の若者はなぜ希望を持ってないのか——日本と主要6カ国の国際比較』草思社.★
- 妹尾麻美、2023、『就活の社会学——大学生と「やりたいこと」』晃洋書房.
- 丹野清人、2007、『越境する雇用システムと外国人労働者』、東京大学出版会.
- 丹野清人、2010、「グローバル化時代の働き方を考える——ジェットコースター賃金と「生きづらさ」の構造」西澤晃彦編『周辺労働力の移動と編成（シリーズ労働再審4）』大月書店、43-72.
- 濱口桂一郎、2009、『新しい労働社会——雇用システムの再構築へ』岩波書店.
- 濱口桂一郎、2010、「「正社員」体制の制度論」佐藤俊樹責任編集、『自由への問い6 労働——働くことの自由と制度』岩波書店、90-111.
- 濱口桂一郎、2013、『若者と労働——「入社」の仕組みから解きほぐす』中央公論新社.★
- 樋口直人、2010、「経済危機と在日ブラジル人——何が大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622: 50-66.
- 樋口直人・稲葉奈々子、2018、「間隙を縫う——ニューカマー第二世代の大学進学」『社会学評論』68(4): 567-583.
- 樋口直人・高谷幸・稲葉奈々子、2019、「移民と貧困をめぐる日本的構図——誰がなぜ貧困に陥るのか」『貧困研究』23: 55-67.

- ファーロング・アンディ、フレッド・カートメル著、乾彰夫・西村貴之・平塚真樹・丸井妙子訳、1997=2009、『若者と社会変容——リスク社会を生きる』大月書店.
- 本田由紀、2014、『社会を結びなおす——教育・仕事・家族の連携へ』岩波書店.★
- 本田由紀、2020、『教育は何を評価してきたのか』岩波書店.
- 本田由紀、2021、『「日本」ってどんな国？ ——国際比較データで社会が見えてくる』筑摩書房.★
- 矢野真和、2011、『「習慣病」になったニッポンの大学——18歳主義・卒業主義・親負担主義からの解放』日本図書センター.★
- 山野上麻衣、2021、「「二回目の危機」——コロナ禍における南米系移民の人々の仕事と生活」鈴木江理子編著、『アンダーコロナの移民たち——日本社会の脆弱性があらわれた場所』明石書店、34-51.
- 山野上麻衣、2022、「アメリカ移民第二世代研究の同化理論における文化概念の位置」『年報社会学論集』35: 92-103.
- 山野上麻衣、2023、「「だって、家族だから」——南米系2世の大人への移行過程と家族の意味づけ」樋口直人・稲葉奈々子編『ニューカマーの世代交代——日本における移民2世の時代』明石書店、21-68.

- Beck, Ulrich and Elisabeth Beck-Gernsheim, 2002, *Individualization: Institutionalized Individualism and its Social and Political Consequences*, SAGE Publications. (=中村好孝ほか訳、2022、『個人化の社会学』、ミネルヴァ書房) .
- Blasco, Andreu López, Wallace McNeish and Andreas Walther eds., 2003, *Young People and Contradictions of Inclusion: Towards Integrated Transition Policies in Europe*, Bristol: Policy Press.
- Walther, Andreas, Barbara Stauber, Andy Biggart, Manuela du Bois-Reymond, Andy Furlong, Andreu López Blasco, Sven Mørch and José Machado Pais, eds., 2002, *Misleading Trajectories: Integration Policies for Young Adults in Europe?*, Leske & Budrich.
- Walther, Andreas, Barbara Stauber and Axel Pohl, 2012, “Support and Success in Youth Transitions: A Comparative Analysis on the Relation Between Subjective and Systemic Factors,” in Mínguez, Almudena Moreno ed., *Family Well-Being: European Perspectives*, Springer, 225-241.